

『農業経済学 [第4版]』

荏開津典生・鈴木宣弘 著

国際領域 主任研究官 木下 順子

本書は農業経済学の初学者向けに書かれたテキストブックです。特に学部レベルでの使用を念頭に置いた内容により、全国の大学の農学系学部や経済学部を中心に広く活用されています。

本書の初版は荏開津典生先生による単著で、1997年3月に発行されました。時期としては先生が東京大学農学部教授職を定年退任された後、千葉経済大学経済学部教授に着任された年の脱稿となる畢生(ひっせい)の力編です。その後、2002年には第2版、2008年には第3版と、約5年をめぐり版を重ね、最新の第4版からは鈴木宣弘東京大学教授との共著となっています。

最新版でも、初版から完成度の高い理論部分を始めとする議論の流れにほとんど変更はありません。ただし、現代農業の新事情に対応するため、世界のFTA等農産物貿易交渉の動向に関する新たなセクション(第7章第6節)が追加されたこと、また最近の農政改革(特に米政策)に関する記述が第12章の中に追加されたことにより、従来の版よりもやや大幅なステップアップとなっています。

本書の体裁上の大きな特徴としては、オリジナルの統計データをもとにした図表が非常に多く参照されている点があげられます。これは、農業経済の理論は事実認識に裏付けられたものであるべきとする執筆者の考えが具体化されたもので、全章を通じて視覚的・量的な理解が促されるレイアウトで統一されています。また、掲載データのほとんどが重版のたびに最新の数値を加えて更新されているため、様々な農業問題の背景にある事実を量的に確認する目的でも常に活用できる一冊となっています。

一方、この手の入門書のタイプを、「身近な問題への関心から入る」ものか、あるいは「きっちり理論から取り組む」ものかで二分するなら、本書はどちらかと言えば後者のタイプの理論書になると思います。また、論理が明快で、修辞や無駄のない質実な語り口も、本書が非常に良い教科書だと評価される理由の一つです。すなわち、執筆者自身の研究課題への関心の強さのあまり読者を置き去りにするこ

とがなく、あくまで初学者への道しるべとして、時勢や立場から中立で普遍的な情報を提供する標準的教科書に仕立てられているということです。農業経済学の探求とは、どこかで主義主張や価値

判断と切り離しがたく結びついているもので、また政策がいかにあるべきかという政治観とも無縁になり得ないところがあるのでしょうか、本書はそうした現実と対峙しながらも、農業経済学の「事実認識の科学」としての本質部分にしっかり根ざした「鋭敏かつ堅牢なコンパス」をもつ重要性を読者に伝えようとしています。この点については、第3版から新たに追加された「終章」の中で、執筆者の「私見」として少し触れられています。

とはいえ、本書は決してデータや理論解説が詰まった単なる参考書のようなものではありません。たとえば、各章末には演習問題が設けられていて、執筆者から読者への問いかけに対し読者なりに考えて答えを出すことが求められています。とりわけ印象に残る問いかけの例をあげると、「家族農場の生活と会社勤務の生活について、自分の好みにもとづき比較せよ(第5章)」、「全世界のすべての人に穀物を同じ量だけ配分する具体的な方法を考えよ(第8章)」などがあります。もちろんこれらに模範解答は付けられていません。藤原信好氏(JIRCAS農村開発領域長)の本書へのレビューにも、「[学生のための教科書に留めておくには惜しい]といえるほどに、考えることの面白さを感じさせる」(2016年12月発行、日本水土総合研究所編『ARDEC』第55号からの引用)と表現されているように、単なる「教科書的」ではない深い味わいの部分も類書にはない大きな特徴です。以上のような多面的な魅力によって、本書は長年にわたって多くの読者の愛読書となってきたのだろとうと思います。



『農業経済学 [第4版]』

著者／荏開津典生・鈴木宣弘

出版年／2015年4月

発行所／岩波書店